E. И. クチャーノフ等著

『文　海』——タングート語刊本の複製——

西田龍雄

1. ソヴィエトでは，最近西夏に関する書物が続々出版されている。1966年に『西夏語訳中国古典集』(В. С. Колоколов и Е. И. Кычанов: Китайская Классика в Тангутском переводе, Москва) が刊行され，1968年にはソフローノフの『タングート語文法』2巻 (М. В. Софронов: Грамматика Тангутского Языка, Москва) が，同じ1968年にクチヤーノフの『タングート国史概説』(Е. И. Кычанов: Очерк Истории Тангутского Государства, Москва) が出版された。本書『文海』は，『西夏語訳中国古典集』につづく，『東方文献叢書』(Памятники Иисьменности Востока) の一つとして (XXV巻)，今春 (1969) 出版された 900 頁に及ぶ大著である(1)。

莫大なコズロフ・コレクションを有するレニングラードのアジア諸民族研究所では，ここ数年来，西夏語（タングート語）の研究が強力に推進されていて，本書は，その西夏研究班のスタッフ，Е. И. Кычанов, К. Б. Кепинг, В. С, Колоколов, А. П. Терентьев-Катанский の協力によつて完成された大きい成果である。

2. 本書は，第一部，第二部の2冊からなり，第一部には，序論として，1) Е. И. Кычанов の「辞書文海，文海雑類とタングートの辞書文献における その位置」(pp. 12—21)，2) А. П. Терентьев-Катанский の「タングートの書籍印刷文献として見た辞書文海・文海雑類」(pp. 22—27)，3) К. Б. Кепинг,「辞書文海の体裁についての若干の意見」(pp. 28—30) の3論文が含まれており，それに本文「文海・文海雑類の翻訳」(pp. 33—495) がつづき，最後に，テキストの写真複製が付いている (pp. 499—607)。

第二部は，全体が付録として扱われ，1) 上声韻目 (pp. 9—10)，2) 上声1—56韻 (pp. 11—142)，3) No. 623 の韻図について復元した上声韻類 (pp. 143—180)(2)，4) N. ネフスキーの資料アルヒーブの平声35韻と36韻 (pp. 181—186)，5) N. ネフスキーの資料アルヒーブの上声60韻と61韻 (pp. 187—189)，6) 辞書『文海』の文字組織による索引 (pp. 190—193)，7) 辞書『文海』の索引の文字要素表 (194—203)，8) 索引 (pp. 204—266)，9) 英文要旨 (pp. 269—271) の九項目から構成される。第一部は，3064字，第二部は2080字，合計5145字が登記され（重複した文字も若干含む），第二部のみが西夏字で書かれている。

第一部の『文海』『文海雑類』の翻訳複製をはじめ第二部全体は，西夏語の研究にとつて，非常に重要な資料の提供であるが，この目次からみてもわかるよう

に，一部と二部は内容の性格がかなり違つていて，第一部は，『文海』『文海雑類』のテキストの翻訳が主目的であるのに対して，第二部は各上声韻に所属する西夏字の提供が目標になつている。後者にも各西夏字にそれぞれ意味が与えらているが，前者のように，西夏人の記述の翻訳ではない。

コズロフが黒城からもち帰つた西夏文献の一つ『文海』については，1918年にIvanov が紹介して以来，Nevsky によつても詳述され，また筆者もすでに多くの機会にその解説を書いたが[3]，その内容と体裁を簡単に述べると，つぎのようになる。『文海』は1124—1128年の間に編纂され，1) 上巻（平声韻）と下巻（上声韻）の2部から成つていたが，いまは上巻のみが残存している。2) 平声韻は97韻に分けられて，2577字が収められる。3) 各韻類のもとに登録される西夏字には，i) 文字の構成法，ii) 意味の注解，iii) 反切による発音の表示がつけられている。たとえば，平声1韻のはじめの文字は，漢字で置き換えると（拙著『西夏文字』p.105），

X	A偏	X者部姓名也復	CD
	B傍	部長之頌言亦也	切四

のようになるが，本書では，つぎのように，ロシヤ語訳されている(p. 33)。

Левая часть/призывного междометия/при кормлении птиц: правая часть знака "рога"

Фамильный знак и имя. Кроме того, в гатхах и заклинаниях: "почтенныи", "старший" (?).

Фц 北 + 盧 4 знака.

/Тр. 布 北 Тиб. *pu* /.

左の部分(偏)／呼びかけのコトバ／鳥を飼う際の：右の部分（傍）角の字。

部姓の字と名前，そのほか頌呪において："尊敬すべき"，"年長の"（?）

反切 北 + 盧 4文字

／転写 布 北 チベット字 *pu*/

『文海』2577字，『文海雑類』489字について，このようなロシヤ語訳の提供は，まつたく大きい貢献といわねばならない（本書評016—参照)。第二部の内容は，それとは異つて，たとえば上声1韻のはじめはつぎのようになつている。

3065 𗍊 дерево（樹）
3066 𗥤 обувь, надеваемая в снег и грязь（履物，雪と泥にはく）
} 普，部 phu

3066の訳は，この文字が2音節の単語 𗥤𗥞（私の再構成音* phu-kaɦ）を構成するはじめの文字であつて，あとの文字が平声17韻に属し，「phu-kaɦ 也，雪，泥中に履くべき也」と注されているからであろうと考えられる（cf. p.08)。普，部は漢字の注音，phu はチベット文字注音を示し，括弧はこの2字が同じ発音で

あることを指示している。

上声韻字は，上掲目次からでも明らかなように，ネフスキーの資料と韻図から採録したものである。ネフスキーの資料は，クチヤーノフが推測したごとく（本書 p. 20），今では散佚してしまつた『文海宝韻』から書き抜いたものと見て誤りはないであろう。

著者は，平声97韻，上声86韻の各韻目字を注音漢字に置き換えて，たとえば，平声１韻は謀，沐，２韻 ○，３韻　須，蘇，胥，４韻　麼のようにする。この韻類の名称については筆者は別の意見をもつている。もし各韻類を漢字に換えてよぶ必要があるのなら，各韻目字を意味でとらえて漢字に置き換えるのが便宜であると思う。平声１韻は“序”韻，２韻は“涼”韻，３韻は“蔵”韻，４韻は“嘴”韻，５韻は“貯”韻のように呼びたい。

韻目字をこのように謀，沐などとよぶのは，著者たちの西夏語音再構成の態度とも関連している。本書全体を通じて，西夏語の再構成形式は一切与えられていない。レニングラード一派は極めて慎重に，再構成音の提出をさけた。『西夏語訳中国古典集』においても，この態度は同じで，『掌中珠』などに見られる漢人の与えた漢字による注音，古典文中で対照できる漢字，チベット文字注音をあげるのみで，それらにもとずいて西夏語の形式を積極的に再構成しなかつた。クチヤーノフは本書第一巻巻首の論文の中で，つぎのように云つている（pp. 19—20）。

「予備的な刊行を意図して，辞書を翻訳したテキストに再構成音を記入することを放棄した。いまのところ２つの再構成の体系がある。一つは，西田龍雄の提案であり，いま一つは M. B. ソフローノフのそれである。再構成音の問題がすべて解決されない限り，この問題について公刊された資料を容易に利用し得ることを望まれると思うので，我々は転写だけに止まることにした」

西夏語形式の再構成は，いままでは資料の不足から，不確実な部分が止む得ず入り込んだが，多くの資料（すべてではない）が出揃つたいまの段階では，再構成形式を十分に検討できるようになり，この分野での議論は，詳細な点を問題にしなければならない状態になつて来た。私は，本書が西夏語音再構成の問題に対して重大な資料を提出した点に，本書のもつとも大きい意義を見出したい。

本書評で，筆者は本書の内容を単に紹介批判するよりはむしろ，この書物に提出された資料を使つて，如何なる仕事ができるか，また如何なる仕事をしていかねばならないかを，私自身の立場から示してみたいと思う。

本書は，決して通読する書物ではない。今後の研究に大いに活用すべき書物である。

3.　まず，私の批判を本書第２部に集中して，容易に発見できる漢字注音の根本的な誤りを指摘することからはじめよう。

〔上声韻字につけられた漢字注音の誤り〕（番号は原著の文字番号を示す）。

p. 16. 上声1韻 3133—3134 勒(?)知 hzu, bsuh

この2字は『同音』で歯頭音124類に属しているから，この注音は理解できない。私の再構成形式は *su₂（上）である。

p. 21. 上声3韻 3186 高，告，勾，溝 thee

この漢字注音は，よく似た別の西夏字（平声43韻，牙音72類，本書1446）にあたえらたもので，3186の字形は，舌頭音39類に属する文字[1]が正しい。私の再構成形式は *thĭuɦ（上）である。（舌頭40類は平声3韻，39類は上声3韻であるから，39•40は通調類である）(4)。

p. 23. 上声3韻 3217—3218 (?)+六

この2字は，舌頭音122類に属し，私の再構成形式は *ndĭu₂ɦ（上）である。

p. 25. 上声5韻 3240—3244 耨，耕，敢

この5字は，舌頭音57類に属するから，この注音は正しくない。私の再構成形式は *nu である。

p. 26. 上声6韻 3251 〔(?)+知〕+暮

この注音は，反切を示している（cf. Nevsky, I. p. 384)(5)。軽唇音独字類に属し，私の再構成形式は *vĭuɦ である。

p. 45. 上声11韻 3479—王+(?)—3480 力。+(?) 捺，曩

この注音は共に不詳。この2字は舌頭音112類に属し，私の再構成形式は *twɪh（上）である（Софронов *пе)。

p. 58. 上声17韻 3631—3632 達

この2字は牙音139類に属し，同類の平声20韻の字には，『掌中珠』(281) に遏の注音がある。私の再構成形式は *ŋgaɦ（上）である。

p. 60. 上声18韻 3653 要

この注音はネフスキーによつている（I. p. 244)。この文字は，流風音独字類に属し，私の再構成形式は *lhĭaɦ（上）である。

p. 62. 上声20韻 3681—3685 嚜

この注音は嘿の誤り（『掌中珠』131)。舌頭音58類に属し，私の再構成形式は *nhaw である。

p. 81. 上声30韻 3908 蒜，酸

この文字は，3904—3908と共に舌頭音139—140類に属し，3904と3907に『掌中珠』乃の注音があり，私の再構成形式は *ndɛ（上）である。この注音，蒜，酸は，歯頭音独字類に属する別の西夏字[2]（平声24韻 *sã）に与えられるべきである（『掌中珠』注音B)。

p. 84. 上声31韻 3948 鐺

---

[1] 𢦏 [2] 𢦏

この注音字は不詳。正歯音類独字に属し，『掌中珠』注音Bに犲，釵，食がある。私の再構成形式は *šʷïs₂ である。

p. 90. 上声33韻　4016—4022　青　h̲rne

この7字は，4015と共に舌頭音44—45類に属し，同類の平声36韻には『掌中珠』寗の注字がある。青は寗の誤りである。私の再構成形式は *neɦ である。

p. 95. 上声34韻　4079—4081　方（万？）　bẹh̲

この3字は，舌頭音91類に属し，『掌中珠』に丂(366)の注音があり，チベット文字注音としては，nheh̲ (vd) がある。私の再構成形式は，*ne である。

p. 102. 上声38韻　4157—4159　狗

この3字は，牙音173類に属し，『掌中珠』注音Bに狗がある。私の再構成形式は *kəw。

p. 102. 上声38韻　4160　菩

この文字は，牙音独字類に属し，『掌中珠』注音Bに口がある。私の再構成形式は khəw である。

p. 119. 上声44韻　4353　無

この注音漢字は，ネフスキーによつているが（II. p. 489. 無〔七仏〕），舌頭音独字類に属して，私の再構成形式は *tïɔɦ（上）である。

p. 120. 上声45韻　4369—4370　比

この注音字は，ネフスキーが別の文字[3]（上声10韻，重唇音23類，本書3387）に与えたもので（II. p. 526，実は皮が正しい。同類の[4]に『掌中珠』皮があたる（355，335)），この2字は4368([5]が正しい字形）と共に舌頭音36類に属する。私の再構成形式は *tɔw である。

p. 127. 上声49韻　4451—4461　餓，我，悔

悔は海の誤りであり，4452の文字の意味にあたる。この11字は，牙音3類に属し，私の再構成形式は，*ŋʷïõ である。

p. 134. 上声52韻　4533—4535　祖宗

この注音字とする祖宗は，4533の文字の意味にあたる。この字は舌頭音148類に属し，私の再構成形式は tïṵ である。

p. 147. 上声56韻　4670　嗲作

この文字は，上声47韻に重出しているから，ここに属するのはおそらく誤りであろう。

p. 147. 上声57韻　4677—4678　dvah̲, wo, wa

4677は重唇音114類に属し，後者は牙音独字類に属する。私の再構成形式は *mbạ と kạ である。

---

[3] 𪓐 [4] 祕 [5] 𪓐

p. 151. 上声62韻　4712　額，栀

額，栀の注音もつ（『掌中珠』B）文字は字形が異つており⑥，牙音独字類に属し，平声9韻である。

4714—4715　浪，羅，4716—4719　蒼　ts'oh̲，ts'o

この6字は，4714—4717（あとの2字は字形が誤る？）浪，羅，4718—4719　蒼とすべきである。私の再構成形式は，前者は lọ，後者は tshọ である。

4720—4727　蕚　ńo

4720は，牙音124類に属するが，この文字は上声77韻にも登録されて，後者には牙音124類の2字が共に入つている（4991，4992）。漢字，チベット字注音からすると，この上声62韻（ŋọ）の方が，上声77韻（*ŋɨr）よりも妥当性があるが，いずれが正しいかいまは決定する決め手がない。4721の文字は不詳，また，4722—4727は，重唇音43類に，4728は重唇音117類に属するから，この注音字蕚 ńo は理解できない。その上，4722—4728の7字は上声63韻に属するべきではないかと考えられる（後述）。*pọ̃ *mọ̃

p. 155. 上声65韻　4757　擺

この文字は，喉音5類に属し，平声3韻にも登録される。この注音字は疑わしい。

p. 160. 上声70韻　4823　流，。留

注音字 流，。留をもつのは，牙音類151，平声87韻に属する文字で，上声70韻の文字はそれとは字形⑦が異つている。4823は4824—4826と共に牙音37類に属する（4825—27はいずれも字形を誤る）。したがつて，4826則の注音字も正しくない。私の再構成形式は kĭur である。4828—4830　民，旻，この3字は，牙音109類に属するから，この注音字は誤りである。私の再構成形式は *ŋĭur である。

p. 164. 上声71韻　4863　名

この文字は，牙音136類に属するから，名の注音は理解できない。私の再構成形式は *ŋγɪr である。

p. 167. 上声73韻　4901—4907　墨，末

4901は重唇音110類に属し，*mar，4902は舌頭音独字類 *tar，4905—4907は喉音50類 *γar，4903は不詳，4904は歯頭音独字類（？）に属する。

p. 174. 上声77韻　4980—4985　乙，㗊　ri

4980は喉音独字に属し，*γɨr，4981—4984は流風音21類に属する（*rɨr）。4985は不詳。

p. 177. 上声80韻　5015—5018，5019—5020　折，舍

5015は軽唇音44類に *vor（？），5016—5020は喉音13類に属する（*γor）。

---

⑥ 紙 ⑦ 紙

p. 178. 上声81韻　5026—5028　則

5026の字形[8]は[9]の誤りであり，重唇音独字に属し，形式は *mĭor。5027—5028は軽唇音29類で，私の再構成形式は *fĭor である。

p. 179. 上声83韻　5042—5043　陀　5044—5046　然

5042は重唇音独字に，5043は舌頭音独字に，5044—46は舌頭音 132 類に属する。

p.180. 上声84韻　5048—5050　(?)＋由，油　gau/gou

この 3 字は舌頭音 154 類に属する。

4.　以上に指摘したような誤りは，この仕事を機械的に進めた結果，自然に起つて来たものと見做してよいであろう。そして，それらは基本的には Nevsky の資料からの写し誤り，あるいは Nevsky の資料自体に含まれる書き誤りに由来しているのかもわからない。

注音漢字の不統一さ，誤謬を能うる限り避けるためには，どうしても『同音』のシステムを利用すべきであつた。少くとも各類に『同音』の所属を示すべきであつた。おそらく Nevsky の資料そのものに不鮮明なところがあるために起つていると考えられる西夏字の字形の誤りも，その操作を経ることによつて避け得たものと思う。いまその中の 2，3 を指摘しよう。

5026の字形が[10]ではなく，[11]であることは，さきに指摘した。この文字は上声81韻の韻目字としても使われているから，その韻目字も[11]に改めるべきである。すると平声90韻，上声81韻の韻目が共に重唇音独字から選び出されていることになつて，韻目字選出の原則とよく一致する(6)。一方，上声78韻の 4977，4998 は字形が不明瞭であるが，これを『同音』と照合すると，歯頭音65類に属する [12] ＜鞭＞ [13] ＜斤＞ であることがわかる。したがつて，誤つて上声81韻に属した＜鞭＞は，上声78韻である のが正しい。私の再構成形式は *tsĭər である (cf. Wr. Tib. lcag 鞭)。

また上声56韻，4656 [14] пресный ＜水くさい＞ は『同音』と照合すると舌頭音70類に属すべき文字であり，その字形は [15] ＜迷い＞ の誤りであることもわかる。*nạ [14] の文字 ＜水くさい＞ は平声17韻に属する。*?ah.

5.　一見非常によく似ているけれども，実際には別字である文字が，西夏文字の中には数多く含まれている。それらの文字の字形を十分に弁別することは，西夏語西夏文字の研究の上で極めて重要であるので，煩わしさをいとわず，さらに多くの例をつけ加えておきたい。これらの文字は，本書の索引では，それぞれ同じ字形として扱われている。

p. 204 [16]　2798 [17] ＜黄土＞: 3480 [16] ＜垢＞

---

[8] [9] [10] [11] [12] [13] [14] [15] [16] [17]

p. 208 [18] 777 [18] <部姓>: 4326 [19] <帽子をかぶる>
p. 217 [20] 563 [21] <ブーツ，雲や泥で履く>: 1521 [20] <助語>
p. 218 [22] 3464 [22] <帽子>: 1283 [23] <子細>（拙著『西夏文字』p. 129 参照）
[24] 1374 [24] <こまかい>: 3123 [25] <部姓>
p. 222 [26] 2351・2327 [27] <太鼓>: 3384 [26] <部姓>
[28] 3859 [29] <云うこと> *yɨ（上）: 1077 [28] <謂う> *ʔyɨ（平）
p. 223 [30] 2318 [30] <選ぶ>: 159 [31] <稲光>
[32] 4791 [32] <功>: 3528 [33] <柱，支え>
p. 227 [34] 912 [35] <雄弁>: 3606 [34] <楽しむ>
p. 228 [36] 491 [36] <去勢する>: 4061 [37] <白粉>
p. 230 [38] 3639 [38] <明後日>: 3343 [38] <鳥の名>
この２字の弁別は明瞭ではないが，3639は *sah，3343は *sɪ である。
p. 231 [39] 1739 [39] <…の間>: 954 [40] <引く>
[41] 511 [41] <地名>: 4767 [42] <三（途）>
p. 233 [43] 512 [43] <部姓>: 1864 [44] <栄える>
p. 234 [45] 3157 [46] <？>: 3268 [45] <らんかん>
p. 235 [47] 798 [48] <果物>: 916 [49] <部姓>: 1728 [50] <卑人>
p. 238 [51] 1372 [51] <博い>: 1839 [52] <増大する>
p. 239 [53] 1087 [53] <打つ>: 4398 [54] <公>
p. 239 [55] 3337 [56] <にくしむ>: 288 [55] <嫌う>
p. 240 [57] 367 [57] <…すべからず>: 1223 [57] <敬う>
この両者の弁別は，明瞭ではない。
p. 242 [58] 936 [58] <天？>: 3477 [58] <天>
この両者も弁別し難い。936 *mʷɪɦ，3477 * ŋüɦ
p. 246 [59] 2280 [59] <集める>: 4847 [60] <部姓>
p. 247 [61] 5022 [62] <？>: 2846 [61] <皮を剝ぐ>
p. 249 [63] 1487 [64] <曲がる>: 5048 [63] <　？　>

---

[18] 纘 [19] 纘 [20] 𢖍 [21] 𢖍 [22] 𢖍 [23] 𢖍 [24] 𢖍 [25] 𢖍 [26] 𢖍 [27] 𢖍
[28] 𢖍 [29] 𢖍 [30] 𢖍 [31] 𢖍 [32] 𢖍 [33] 𢖍 [34] 𢖍 [35] 𢖍 [36] 𢖍 [37] 𢖍
[38] 𢖍 [39] 𢖍 [40] 𢖍 [41] 𢖍 [42] 𢖍 [43] 𢖍 [44] 𢖍 [45] 𢖍 [46] 𢖍 [47] 𢖍
[48] 𢖍 [49] 𢖍 [50] 𢖍 [51] 𢖍 [52] 𢖍 [53] 𢖍 [54] 𢖍 [55] 𢖍 [56] 𢖍 [57] 𢖍
[58] 𢖍 [59] 𢖍 [60] 𢖍 [61] 𢖍 [62] 𢖍 [63] 𢖍 [64] 𢖍

p. 252 [65] 2501 [65] <沼地>: 4823 [66] <修行>

p. 253 [67] 5024 [67] <?>: 4391 [67] <土台?>

4391の字形は確かであるが，5024は5025とともに，『同音』の所属も不詳である。この2字の弁別は明らかではない。

p. 257 [68] 3925 [68] <?>: 4837 [68] <?>

3925の文字は確かであるが，後者はそれとどこで弁別されたのか明らかではない。

p. 262 [69] 4350 [69] <吾，予>: 589 [70] <礫>

p. 266 [71] 1446 [72] <それ>: 3186 [71] <部姓>

6. さて，西夏語形式の再構成は，『同音』のシステムを基準にして，『文海』『文海雑類』で与えられている反切を中心にそのほかの資料を活用するのが，最良の方法であることは，もはや疑い得ない。その意味で，本書第二部に提出される上声韻は絶対的な資料になる。しかし，この上声韻の各韻類には残念ながら反切がつけられていない。その点，『文海』の平声韻に比べて資料としての価値ははるかに少ない。しかし，上声韻形式を設定する決定的な根拠を見付け出すことを可能にする方法がないわけではない。私は，この上声韻類を扱つている中に，『同音』のシステムを基準にすれば平声韻の反切を上声韻に活用できることに気付いた。上声韻のみしかない韻類はいたし方がないが平声・上声が一対をなす韻類では，平声韻の反切が上声韻形式設定のきめ手になる。この段階では，文海の反切は平声韻の範囲のみならず，本来の役割以上に大きい価値をもつてくる。

いま，その文海の反切を利用した平声韻・上声韻連合体系設定の例として平声1韻・上声1韻の例をつぎに示してみよう。

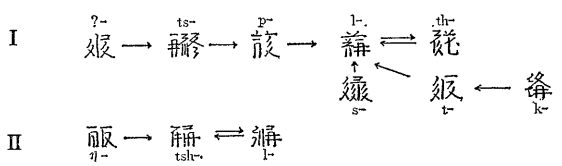
『文海』平声1韻は，24小類に分かれる。

	平声韻	反切		『同音』	再構成形式	『同音』	上声韻所属字
1.	𗀜	𗍫𗍬	切4	重唇35	*pu		
2.	𗀝	𗍬𗍬	切4	重唇34	*phu	重唇34	3065—3066
3.	𗀞	𗍭𗍮	切6	重唇29	*mu	重唇30	3067
4.	𗀟	𗍯𗍬	切4	舌頭62	*tu		
5.	𗀠	𗍰𗍬	切6	舌頭31	*thu	舌頭31 舌頭32	3068—3069 3070—3072
6.	𗀡	𗍲𗍳	切2	舌頭146	*nu		
7.	𗀢	𗍴𗍵	切2	舌頭45	*n_2u		
8.	𗀣	𗍶𗍵		牙音独	*ku		
9.	𗀤	𗍷𗍳	切4	牙音7	*khu	牙音7	3073—3074

[65] [66] [67] [68] [69] [70] [71] [72]

10.	𗼈	𗼈𗼈	切2	牙音8	*kh_2u		
11.	𗼈	𗼈𗼈	切5	牙音62	*ŋu		
					*ŋgu	牙音28	3075—3079
12.	𗼈	𗼈𗼈		齒頭39	*tsu	齒頭39	3080
13.	𗼈	𗼈𗼈		齒頭独	*tshu		
14.	𗼈	𗼈𗼈	切3	齒頭98	*tsh_2u		
15.	𗼈	𗼈𗼈	切2	齒頭独	*su	齒頭20	3081—3084
16.	𗼈	𗼈𗼈		喉音83	*ʔu	喉音82	3085—3093
17.	𗼈	𗼈𗼈		喉音55	*γu		
18.	𗼈	𗼈𗼈	切4	流風41	*lu	流風40	3094—3109
19.	𗼈	𗼈𗼈		流風163	*ʁu	流風163	3110—3111
					*thu_2	舌頭独	3112
20.	𗼈	𗼈𗼈		舌頭独	*nu_2	舌頭80	3113—3115
21.	𗼈	𗼈𗼈		牙音独	*$ŋu_2$	牙音1	3116—3128
22.	𗼈	𗼈𗼈		齒頭132	*$tshu_2$	齒頭132	3129
23.	𗼈	？𗼈		齒頭独	*su_2		3130
24.	𗼈	𗼈𗼈		流風？	*lu_2	流風152	3131—3132
					*su_2	齒頭124	3133—3134

平声韻の反切下字はつぎのように2類に分れて系聯する。



Iには -u を，IIには $-u_2$ を再構成した。おそらく上声1韻にも同じように反切下字は2類に分かれていたにちがいない。しかし，-u と $-u_2$ が如何なる区別をもつたかは，今の段階では明らかではない。

平声1韻・上声1韻共に，重唇，舌頭，牙，齒頭，喉，流風音にはじまる音節はあるが，軽唇，舌上，正齒音とは結び付かなかつた特徴が認められる。

そして，『同音』の小類の連結関係を利用して平声韻の反切上字を上声韻にも適用してみると，この表でみる限り，上声韻には2つの大きい特徴がでてくる。第一には平声韻に比べて，すき間がずつと多いことである。第二につぎの事実がある。西夏語では多くの平声韻類で無声出気音 kh-, th-, ph-, tsh-, n-, ŋ-, m-, s- に2系列の反切上字が認められる。私は，この2系列は，High register と Low

register を代表していて，後者は古い voiced series の初頭音から来源していると考える。たとえばこの例でかりにつぎの図式を設定すると，

H.	9	khu	13	tshu	6	nu
L.	10	kh_2u	14	tsh_2u	7	n_2u

となつて，9. 13. 6 はそれぞれ，*khu, *tshu, *hnu から来源したが，10. 14. 7 の方は *gu, *dzu, *nu が古形式であつたといえる。ところが上声韻には，この有声音の系列がない（あるいは，歯頭音独字の su_2（上）に対して，歯頭音124類は s_2u_2（上）<*zu_2 であつたかと疑える）。

その上，このように平声韻と上声韻を関連ずける私の操作は，本書で，著者が決定している上声韻類の帰属の仕方に誤りがあることをも指摘する。

平声55韻，56韻と著者の決定する上声48韻と49韻の対照表をつぎにあげてみる（私の再構成音による）。

平声55韻			上声48韻		
	再構成音	『同音』	『同音』	（本書文字番号）	
1	pĭõ	重唇独			
2	phĭõ	重唇 115			
3	$ph_2ĭõ$	重唇 115			
4	$n_ɸĭõ$	舌上独	舌上 4	4437—4438	
5	kĭõ	牙 135	牙 135	4439—4440	
6	khĭõ	牙 独			
7	tšĭõ	正歯 118			
8	tšhĭõ	正歯独	正歯独	4441	
9	γĭõ	正歯独	喉 独	4442	
11	fĭõ	軽唇独			
			流風 140	4443—4444	
			舌頭独	4445	*nĭõ
			舌上 3	4446—4447	*$n_ɸĭõ$(?)
平声56韻					
1	kĭʷõ	牙 33	牙 33	4448	
2	khĭʷõ	牙 101	牙 100	4449—4450	
			牙 3	4451—4461	*ŋĭʷõ
5	tšĭʷõ	正歯独	正歯独	4462	
6	šĭʷõ	正歯 33	正歯 33	4463—4467	
7	γĭʷõ	喉 独	喉 20	4468—4474	
			上声49韻		
8	xĭʷõ	喉 15	喉 15	4475—4477 (4476は喉独字)	

9	ʔyĭʷõ	喉	92	喉	独	4478	
10	lĭʷõ	流	風 62	流	風 62	4479—4481	
13	tšĭʷõ	正	歯 独	?		4482	
14	ŋĭʷõ	牙	171	牙	163	4483—4484	
15	šĭʷõ	正	歯 独	正	歯 独	4485(?)	
				正	歯 独	4487	*tšĭʷõ(?)
				喉	20	4488	*ʔyĭʷõ(?)

さきの原則からみると，上声48韻は少くとも牙音33類以下を含まず，それらは平声56韻の対をなす上声49韻に入るべきであることがわかる。4445舌頭音独字は平声71韻 *nǫ̣ の形式も並存するが，あるいは上声48韻は，舌上音３類からはじまつた可能性もある。

この上声48韻を分割して，48韻，49韻とすべきことは，つぎにあげる『同音』の通調類からでも証明できる。

牙音33類は，平声56韻二字と上声49韻一字からなる。後者が上声48韻であれば平声韻・上声韻連合の原則からみて工合がわるい。牙音100類は上声49韻，101類は平声56韻であり，前者が上声48韻であると原則に合わない。

正歯音33類（11字）中，６字が平声56韻，５字が上声49韻である。後者が上声48韻であれば，平声韻・上声韻連合の原則に合わなくなる。

私は『西夏語の研究』で，平声74韻と上声65韻を一対とし，上声68韻を独韻としたが（p. 30），実は，平声74韻は上声68韻と対をなしていることが，同じ操作から決定できる。平声74韻と上声65韻は全く合わないが，平声74韻と上声68韻の小類はつぎのようにぴつたりと一致する。

平声74韻				上声68韻		
1.	mĭẹ	重唇	5	重唇	4	4774—4776
				重唇	5	4777—4783
2.	mbĭẹ	重唇	独			
3.	nĭe	舌頭	173	舌頭	172	4784—4788
4.	xĭẹ	喉	30			
5.	γĭẹ	喉	60	喉	70	4789—4790
6.	rĭẹ	流風	16—17	流風	16	4791—4810
7.	rĭẹ	流風	17			
8.	lĭẹ	流風	独	流風	独	4811
9.	fĭẹ	軽唇	11	軽唇	10	4812—4814

上声62韻の最後の２類も，上例ほど強い根拠をもたないが，平声71韻の対をなす上声63韻に属するものと認めたい。

平声71韻				上声62韻⟶上声63韻		
1	pǫ̣	重唇	独	重唇	43	4722—4727

2	mõ	重唇独	｜	重唇 117	4728
				上声 63 韻	
3	tõ	舌頭 18	｜	舌頭 18	4729

したがつて，私の平声韻・上声韻対照表は一部をつぎのように訂正したい(7)。

平声韻	上声韻	平声韻	上声韻
平 46	×	平 74	上 68
×	上 41	↓	↓
↓	↓	平 78	×
平 57	×	平 79	上 72
×	上 50	↓	↓
↓	↓	平 83	×
×	上 65	×	上 75
×	上 67		

なお，本書には，上声62韻4718，4719と上声61韻5144，5145，上声11韻3471，3472，3473，3478と上声52韻4646，4648，4649，4650のような完全な重出文字があるが，これらは，どちらか一方が誤つて入つているのであろう。

以上の事柄は『文海』の平声韻と上声韻はあくまで一対をなしていて，しかも『文海』と『同音』がまつたく無関係に作られたのではなくて，同じ編集陣で作成された大きい蓋然性を示している。

そして，また『文海』のシステムは平声韻のみ，上声韻のみを別々に考慮して作られたのではなく，両者を一対のものとして扱つたことは，若干の上声韻が平声韻の中に入れ込まれている事実からもうかがえる。これは非常に重要な事実である。平声韻のみで，それに対応する上声韻がたてられていない韻類は，全体で19韻あるが，それらには上声韻がまつたくなかつたのかというと実はそうではない。

いま，一々について検討しよう。

平声6韻：これには上声韻はなかつた。

平声13韻：『文海』で「上声也」と注される *mbʷɪɦ に上声形式が認められる。

*mbʷɪɦ（平）＜馳せる＞：*mbʷɪɦ（上）＜務める＞

平声16韻：これには上声形式はない。

平声31韻：『文海』で「上声也」と注されている2つの音節に上声形式がある。

*ɯʒvün（平）＜もつ＞：ɯʒvün（上）＜降伏する＞

*nün（平）＜疾い＞：*nün（上）＜嘴＞

平声38韻：平声・上声の対立が認められる音節がある。

*mbeʸ（平）＜快楽＞：*mbeʸ（上）＜蛆虫の一種＞

後者には『文海』に「上を以て云う」の注がある。

平声40韻：『文海』で「上声」の注があり，上声で発音された形式が一つ考えられる。

*ndĭe（上）＜草の名＞

平声46韻：上声形式はない。

平声47韻：上声形式はない。

平声48韻：『文海』で「上声也」の注をもつ lofi（上）＜まがる＞がある。

平声57韻：上声形式はない。

平声68韻：上声形式はない。

平声78韻：つぎの2形式は上声であつた。

*fiĕr（平）＜惜しむ＞：*fiĕr（上）＜擲げる＞

× ：*tshiĕr（上）＜方便＞

平声81韻：上声形式はない。

平声83韻：『文海』に「上声を以て云う」の注をもつ *ŋgar（上）＜軽卒な＞がある。

平声85韻：上声形式はない。

平声94韻：*kʷǫ（上）＜錦＞：*ŋʷǫ(上)＜丈(夫)＞は，上声形式である。

平声95，96，97韻には上声形式はない。

同じように，対をなす平声韻をもたない上声韻のみの韻類にも，少数の平声韻が含まれている可能性は否定できない。しかし，いまは『文海』の上声韻の注や反切がわからないから，この問題は保留しておいて，つぎに『文海雑類』の性格を述べてみたい。

7. 『同音』には6千余字が登録されている。これに対して『文海』の平声韻は全部で96韻2577字である。すると残りはすべて上声韻かというとそうではない。『文海』の平声の部に登録されていない平声韻がなお多く存在した。その中のいくつかが『文海雑類』に記録されている。

かつて Nevsky が推測したように，『文海雑類』を『文海』の補遺として考えて差支えがないのではないか（このことは本書クチヤーノフの論文の中にも述べられて，『文海雑類』には，何らかの理由で『文海』に入らなかつた文字が配列されたといつている（p. 15））。

『文海』に登録されていない平声韻は，これまた『同音』のシステムから，ある程度は判明した。任意に小類を選んでみると，たとえば，牙音112類は3字あるが，その中2字のみが，『文海』平声30韻に登録されている。しかし，残りの1字も平声30韻であろうと推測はできた。

牙音120類も3字からなるが，その中2字のみが『文海』平声78韻に属する。したがつて，残りの1字も，平声78韻であろうと考えて差支えがない。

何故，このような3字の中，2字のみが登録されて，他の1字がとり残された

のか，これが問題になるであろう。理由のはつきりしないいわばこのような省略が『文海』の随所に見出されるのである。おそらくその理由は，序か跋に明記されていたと思われるが，いまそれが伝らないのは惜しい[8]。

『文海雑類』は，いまは限られた断片がのこるのみではあるが，『文海』を補足する性格をもつために，その研究は重要な意味をもつてくる。

本書では，『文海』につづいて『文海雑類』が翻訳されているが，個々の韻類についての考察は全くなされていない。私は『文海雑類』の研究課題はつぎの2点にあると思う。

1. 『文海雑類』から平声韻と上声韻を選びわけて，『文海』の枠組みを補うこと。
2. 『文海雑類』の反切上字・下字と『文海』の反切上字・下字の関連性を探求すること。

第一の課題のための作業として，簡単な例からあげてみよう。

『文海雑類』の中から，つぎのA．B．C3組の反切を取り出せる。

A1. 𗍫 𗥤𗢭 B1. 𗤶 𗥤𗅋 C1. 𗥒 𗥞𗥟

2. 𗦲 𗢭𗦲 2. 𗧓 𗏵𗥞 2. 𗦳 𗥤𗥟

3. 𗅋 𗥞𗥤

この3組は，反切下字の性格から，Aは平声1韻，Bは平声2韻，Cは上声2韻と所属韻をはつきりと証明できる。その再構成形式は，

A1. *ndzu（平） B1. *ndzĭu（平） C1. *tšh$_2$ĭu(?)（上）

2. *ndzu（平） 2. *tšh$_2$ĭu(?)（平） 2. *ndzĭu（上）

3. *ñĭu（平）

と設定する（B.2とC.1は正歯音45類に入つていて（2字1類），反切上字はほかと系聯しないために確かではないが，かりに *tšh$_2$- としておく）。その結果，上掲の平声1韻，上声1韻の対照表には *ndzu がなかつたが，『文海雑類』からその形式を補うことができる。しかし『文海雑類』の文字の排列順序はなお明らかではない。残存する断片の中で，牙音の項には5類6字が入つていて，反切とその下字から決定できる所属韻，『同音』の所属類，再構成形式を示すとつぎのようになる。

1.	𗥒	𗥞𗥟	切2	平声9韻	牙音 121	*kɪĕ
2.	𗥞	𗥤𗥟		平声21韻	牙音 独	*kĭaɦ
3.	𗥟	𗥟𗥞		平声4韻	牙音 183	*kuɦ
4.	𗥞	𗥤𗥟		平声27韻	牙音 独	*ŋ^{w}üɦ
5.	𗥟	反切	欠	?	牙音 独	*?

この2番目の例をとり上げてみよう。平声21韻の反切下字は2類に分かれる。

I. 𢖍 → 𢖍 ⇌ 𢖍 (開口)　　II. 𢖍 ⇌ 𢖍 (合口)

ところが，この2類のいずれとも系聯しない反切が一つあつた。𢖍　𢖍 *khĭaɦ この反切下字は，実は上掲の『文海雑類』の牙音第2番目の文字と相互系聯しているではないか。それがI類とどのように弁別されるのかは明らかではないが，平声21韻の反切下字は，その結果，I．II．III類にわかれることになる（I -ĭaɦ，II-ʷĭaɦ，III-ĭaɦ)。

第2の課題としてあげた『文海』『文海雑類』の間の反切字の相互関聯は，この例からでも，非常に密切であることがよくわかる。

8. つぎに本書のロシヤ語訳の検討をつけ加えておきたい。本書第一部の『文海』『文海雑類』のロシヤ語訳は正確に与えられているが，やや再考を要する文字もある。たとえば，

平声1韻 /43/ の注は，漢字に改めるとつぎのようになる。「tshu 者，tshĭuɦ 也，鍋抜 tshu 之謂也」<tshu とは tshĭuɦ なり，鍋を抜く tshu の意味なり> tshĭuɦ は平声3韻に属して，（本書 /142/）「tshĭuɦ とは，tshu なり，鍋を抜く tshĭuɦ の意なり」の注がついている。そして /142/ の文字は <つかむ>を意符としているから，これは「鍋を火からおろす時に使う道具」であろうと推定できる。それにも拘わらず，著者はこの文字を /43/ "подвесить колокольчик, бубенчик "小鈴を懸ける" と訳している。

平声1韻 /45/ の注は，漢字に改めるとつぎのようになる。「坐眠之謂也」つまり <いねむり> を意味した。しかし，著者の訳では 1"Имеет значение "сидеть" и "лежать" "坐る" と "横になる" の意味がある" となつている。

平声1韻 /48/ の文字は「死棄処 thu ʔu 院之謂」と漢字に置き換え得る。「死体を棄てるところ平等院の意」と訳せるが，著者は "Название того места, которое устанавливают для оставления мертвых" (死人を放置するように定められたその場所）と訳している。

平声1韻 /51/ の注は，「炉也，火鉢也」と訳せるが，著者は，"жаровня, курильница, плавить, расплавлять огнем" (こん炉，香炉，火で溶かすこと）と訳す。あとの注字は，『掌中珠』で漢語の "火爐" にあたつている (236)。なお，この単語は，漢語 "炉＝爐" からの借用語である。

第2部の上声韻に属する西夏文字に与えられた訳語には，なお検討しなければならない場合が多くあつた。いま若干の例をあげてみたい。

/4753/ Название насекомого <昆虫の名>，この文字は，"虫" 偏に "黒い" と分析できて，実は<おたまじやくし>を指した[9]。

/3343/ послезавтра は <鳥の名>とすべきである (*sɪ)。/3639/ にも同じ訳語があるが，この方は正しい (*saɦ)。

/3342××/ は3339と同字であり，лошадь (?) は <ロバ>が正しい。

/3147/ транскрипционный знак skr. rju は，<樹> の意。漢語の“樹”よりの借用語である。

/3384/ “барабан”（大鼓）は <部姓> が正しい。

/4032/ “канон”（経典）は，漢語“経”の誤訳であり，この文字は“たて糸”の意味である。

/3877/ は字形が誤つていて，その意味は“слезы”（涙）ではない。涙は平声30韻 /1122/ に出てくる。

字形の誤りから，ロシヤ語訳が与えられていないが，その意味が明瞭である文字も若干ある。

/3466/ 73 <引き臼>（拙著「西夏文字小字典」番号 107-072），/4655/ 74 <事柄> (230-083)，/4657/ 75 <冷めたい> (85-082)，/4701/ 76 <識る> (47-041)，/4816/ 77 <寒土> (210-131)，/4827/ 78 <盗む>，/4835/ 79 <子を生む> (?) (223-111)，/4853/ 80 <亀> (203-072)，/4860/ 81 <雨> (181-094)，/4864/ 82 <台> (8-121)，/4895/ 83 <かぶと> (28-135)，/4905/ 84 <胸> (202-071)，/4919/ 85 <恥> (176-041)，/4937/ 86 <指> (39-051)，/4946/ 87 <影> (9-091)，/4955/ 88 <背骨>(85-071)。

本書第二部の中で，異つた西夏字に同じロシヤ語訳がついている文字がかなりある。たとえば，могила は4091，4160，3239，3586の4字にあてられる。この中4160は3239の文字の字形と混同して起つた誤りであるが，そのほかの字は，同義語であつて，この訳のみでは区別し難い。しかし，もしここで各文字に漢字を与えるとなると，意味の弁別上，大へてん便利になる。4091には墳，3239には墓，3586には塚というように。

пара の訳は，4714，4382，4898，4900，3285に見られる。4714には“対”を，4382には“雙”を，4898には“両”(?) を，（4900と3285は区別し難い）与えると，相互の関聯がはつきりする。

говорить の訳は，4272，4274，4401にあるが，かりに，これを，告，説，語と置き換えると，各文字の意味と，相互の区別が一層明らかになる。

西夏文字には，このような同義字が多くあつて，その弁別は，今後の西夏文字研究にとつて，重要な問題の一つである。私は，同義語を字形の上で区別するために，上述のように漢字をつける方法をとつていきたいと思う。それには一つの危険，すなわち（上述の“経”についておこるような）漢字面のみにとらわれる

---

73 [illegible] 74 [illegible] 75 [illegible] 76 [illegible] 77 [illegible] 78 [illegible] 79 [illegible] 80 [illegible] 81 [illegible] 82 [illegible] 83 [illegible] 84 [illegible] 85 [illegible] 86 [illegible] 87 [illegible] 88 [illegible]

誤解をつねに避ける工夫をしていかねばならない。

言葉としての同義語の弁別は，何よりも単語形式の来源の違いを明らかにすることからはじめるべきであろう。漢語からの借用語，チィヤン語系の単語，モソ語系，ロロ語系の単語，チベット語系の単語などの判定が重要な課題になつてくる。同義語・類義語の取扱いには，コズロフ蒐集品中の西夏人の著作（1189年編）『同義一類』が，おそらく有用な資料になるであろう。

9. この『文海』『文海雑類』の翻訳は，西夏語西夏文字の研究にとつて確かに大きい貢献であつた。しかし，西夏語の研究自体は，この言語の特異な構造のゆえに，なお多くの問題をかかえている。私はこの一文で，かなり詳細な点について遠慮なく述べたが，今後の西夏語研究は，大きい枠付けとともに，より細部にたち入つて議論されていくに違いない。本書は，その段階に導く役割を十分に果たすであろう。

西夏の研究者は，本書につづいて，コズロフ蒐集品中の他の資料も出来るだけ早い時期に何らかの形で続々公刊されんことを心から願つている。

最後に，本書の西夏文字索引は，巧みに考案されたものであることをつけ加えておかねばならない。

Море Письмен Факсимиле Тангутских Ксилографов

Перевод с Тангутского, вступительные статьи и приложения К. Б. Кепинг, В. С. Колоколова, Е. И. Кычанова и А. П. Терентьева—Катанского. Часть 1. pp. 607. Часть 2. pp. 271. Москва. 1969. (Памятники Письменности Востока XXV)

註

(1) 『西夏語訳中国古典集』については，拙稿「西夏語訳『論語』について」『吉川博士退休記念論文集』1968を，『タングート国史略説』については，『東洋史研究』28巻2号，1970所載（予定）の拙文を見ていただきたい。

(2) No. 623 の韻図とは，つぎのように説明されている。(『五声切韻』の一つ)

10×8 枠組なし：まちまちの数の文字をもつ5行詰；図の中で，別々の紙葉に，『文海』の韻目字の表が記入されている。頁なし，183枚，保存十分，(3. И. Горбачева и Е. И. Кычанов, Тангутские Рукописи и Ксилографы, Москва 1963. p. 51)

(3) А. И. Иванов, Памятники тангутского письма, Известия Российской Академии Наук, 1918 No. 8; N Nevsky, Concerning tangut dictionaries『狩野教授還暦記念支那学論叢』1927，西田龍雄『西夏語の研究』I 座右宝刊行会1964，『西夏文字』紀伊国屋書店 1967，「西夏文字の解読」『数理科学』1968. 11 など，本書 pp. 12—13 Note 5（クチヤーノフの論文）に詳しい。

『文海』は中国の『広韻』の体裁を模倣したと考えられるが，クチヤーノフは，文海に文字の構成法の解説がついているところから，それは西夏文字の特殊な性格から自然にそうなつたのであろうけれども，許慎の『説文』の体裁を受け入れたと見做せるという(pp. 15—16)。なお，クチヤーノフは『広韻』を1007—1011年とするが，その成立年は1008年が定説ではないか。

(4) 拙著『西夏語の研究』I pp. 31—32 参照。

(5) H. A. Невский, Тангутская Филология. I. II. Москва, 1960

(6) 拙著『西夏語の研究』I. pp. 27— 参照。

(7) 拙著『西夏語の研究』I. pp. 29— 参照。

(8) クチヤーノフは，「『同音』の文字が約5715字，本書で記録する文字は約5100字で，その間に600字の差異がある。それがここではわからない上声62韻と64韻に入つていると考えることはできない。それらは若干の資料にある平声・上声韻でもあり得る」という。この平・上声韻は，ネフスキーも記しているが，それが平声韻・上声韻に対立する声調類を代表したのかどうかは，いまはわからない。

(9) 拙文「西夏」『モンゴル帝国』世界文化社，1969. p. 83 参照。

東洋学報　第52巻第2号　正　誤　表

頁	行	誤	正
01	8	Иисьменности	Письменности
04	19	*пе	*ne
〃	下3	*sã	*sã
07	下7	*nạ	*na
〃	下7	*ʔah	*ʔaɦ
013	下5	*ɯvün	*ŋvün